

追 悼 文

お 別 れ の 詞

芦 田 文 夫

馬原先生、あまりにも突然のことで、茫然自失の状態です。先生が亡くなられたとは誰も信じられず、一昨日は立命館の全キャンパスを強い衝撃が走りぬけました。先生は、それほど多くの教職員や学生・生徒諸君の敬愛を集めておられたからです。今でも、あの上品な白髪と眼鏡の奥のすこし眩しそうな微笑みが、どこからか現れてきそうな気がしてなりません。

先生が立命館大学経済学部教授として専任でお出でいただけるようになったのは1980年のことですが、'56年には本学の文学部日本史学科を卒業され、'60年には同大学院を修了されたあと、'63年からはいくつかの学部で非常勤講師をお願いしてきておりました。

研究者としての業績については、日本史学の先達であり同僚でもあった後藤靖立命館大学名誉教授からも、かねがね次のように伺っていました。「馬原先生が自分の学問の根底に据えておられた問題意識は、“人間の平等と人権の確立”ということであった。この視点から、平等と人権を奪われた未解放部落の歴史と現状の研究に全精力を注がれた。その研究のひとつの到達点が生1971年に出版された名著『日本資本主義と部落問題』であったが、先生はそこにとどまっているのではなく、さらに新しい理論の形成を目指して実証的研究にとりくんでいかれた。その成果が、今年出版された『部落解放運動の70年』となって実を結んだ」のだと。

本学の専任教員となられてからもとくに私どもを教え導いていただいたのは、部落問題、人権問題の教学実践にかんしてでありました。長らく人文科学研究所の部落問題研究室長を勤められ、『同和教育』パンフレット・『人権問題』パンフレットの編集・執筆にも中心的な役割を果たしてこられました。

また、先生の母校でもある私ども立命館学園をよくするために、平和と民主主義の教学理念のいっそうの発展のために、文字どおり心血を注がれました。学内のどんな激戦でも、厭な顔ひとつせず、全力投球で誠実に努めてこられました。なかでも、1988年から3年間、立命館高等学校・中学校の校長の要職につかれ、よく「子供達を抱きしめてやりたくなるほどとにかく可愛いんだ」と全身全霊で打ち込んでおられました。深草学舎への移転と男女共学という全く新しい枠組みづくりの後の基盤整備のため日夜奮闘された実績は、学園史上にいつまでも残る功績でありましょう。

馬原先生は、新しい著書にこう書いておられます。「未解放部落住民が解放され、市民としての自立を獲得するためには、地域住民と共通の生活基盤と生活様式を獲得し、文化や教育や、福祉の課題を共有すること」だと。それを実現するために、先生はいろんな社会的な運動にも積極的に参加されました。部落解放運動の他にも、例えば、学園内では1984年の立命館教職員組合委員長、地域では北陵高校PTA会長などなど、枚挙にいとまがないほどです。署名簿を一人一人に持って回られるような地道な真摯な姿勢には、私どもの多くが眼を開かせられる思いでした。学生諸君のサークル活動にも、時間が許すかぎり講演や助言につきあわれ、その感化を受けた青年諸君は数限りなく全国に広がり育っています。馬原先生、先生が生涯かけて追い求められた社会革新の事業は、この若者たちが必ずやその遺志をついで前進させ成就させてくれるであろうことを、私は確信いたします。

立命館高等学校・中学校の校長職のあと、先生は1年間の研究専念の国内留学をとられ、この間に堰を切ったように二冊の著書をまとめられました。そして、『立命館百年史』の編纂の仕事にも援助しようとされていました。研究の上でも、生活の上でも、これから有終の美を結実させようと言われていたのに、

ほんとに残念です。もっと時間をさしあげたかったという思いで一杯です。私も立命館学園の目前の飛躍、理工学部のみわこキャンパスへの拡充移転や新しい政策科学部の設置、その達成を『立命館百年史』に書き込んでいただきたかった。しかし、今は、これらを必ず成功させることを霊前にお誓いするだけです。

こよなく酒を愛された先生。よく会議が終わって、北大路界限でタクシーを降り、楽しく飲んだものでした。あげくの果は、夜おそく幡枝の家にまでおしかけ、奥さんやお嬢さんも加わって、人権問題や社会主義問題を論じたものです。馬原先生、しばらくは淋しいでしょうが、彼方の岸で盃を傾けていてください。やがて、どれほど社会が変わったか、どれほど我学園が発展したか、それを土産に報告してまた一緒に乾杯したいと思います。どうか安らかにお休みください。

突然で、深い悲しみの中におられるご遺族の皆様にご心からお悔やみを申しあげ、お別れの詞とさせていただきます。

（1992年7月4日 弔辞より）

馬原鉄男教授の追憶

岩井忠熊

馬原君（永い間のつき合いで使ってきた言い方をゆるしていただきたい）との初めての出会いがいつだったのか、はっきりしない。とに角、広小路キャンパスの中でも中心地から市電の通りをはさんだ文学部校舎だったことはたしかである。新築落成と同時に私が着任したのだから、木造二階建の文学部ができたのは、1949年だった。歩くと廊下が音をたててきしんだ。冬になると鉄火鉢に炭火、やがてダルマストーブで石炭をたいた。橋本循文学部長が、冬の夜に火の始末が心配で眠れないとこぼされたのをおぼえている。まるで焚きつけをかさねたような校舎だった。

あの粗末な校舎で戦後日本の青春を燃焼させた一団がいた。1956年（昭和31）日本史学専攻卒業のクラスはたしかにそういう学年である。彼らが1回生の時にあの〈血のメーデー事件〉があり、やがて破防法反対運動が高揚した。馬原君は旧制師範を経て宮崎大学学芸学部二年課程修了で教職についていたはずだから、そのような時勢を教育現場で体験したことになる。彼が立命館大学に編入された時、同学年の多くの学生よりも3～4年の年長だったが（もっとも戦後の混乱の影響で、そんな例はめずらしくもなかった）、その学生たちも修羅場のような状況を体験した者がすくなくなかったはずである。

私の馬原君の記憶は、文学部自治会の活動的学生の姿としてはじまる。教室の演壇でしゃべっている彼の面影が今も去らない。私は自治会委員長だったと思いがいしていたが、委員長は片岡秀計君（のち鴨沂高校・定年退職）で馬原君は副委員長だったようだ。然し、奇妙とも残念ともいえるのは、授業の中での彼の姿がまったく記憶にうかばないことだ。馬原君は酒豪、それも宮崎県

出身で焼酎好きときているから、下戸の私はその方のつき合いを敬遠せざるをえない。ただただ皆が噂する彼の「武勇伝」を聞かされて驚いたくらいだ。

馬原君の存在をはっきり再認識したのは卒業論文「自由民権運動に於ける玄洋社の歴史的評価」を読んだ時である。当時の奈良本辰也教授が新制大学の卒業論文として最高の出来ばえと激賞されたのをおぼえている。間もなく『日本史研究』（28号）に掲載された。その後いろんな新しい史料が発掘されたために、当時の評価が今でもそのまま通用するわけではないが、とに角、玄洋社に対する彼の新しい見方が、その後かなり永い間、学界の新常識として定着していったことは事実である。この研究の発表と自信が、馬原君のその後を、大学院進学そして研究者への道に進ませる重大な機縁となったのだろう。

名簿をくって見ると、馬原君のクラスは学生運動だけでなく、学問研究でも活気ある人たちでしめられていたことが今さらのように思い出される。後に学士院賞を受けた考古学の田辺昭三君（京都造形芸術大学教授）が同級である。二部では日本美術史の田中日佐夫君（成城大学教授）がいた。一部学生の研究会がまだ終わらないところに二部学生が登校してくるので、日本史学研究室は一部・二部学生交流の場であり、共通の研究会活動がさかんだ。後の経済学部事務長秀平麗二郎君は熱っぽく洋学への関心を語っていた。文学部の衣笠安喜教授と馬原君の好論敵である師岡佑行君（京都部落史研究所長）が一年上、赤井達郎君（奈良教育大学教授）、岩井宏実君（国立歴史民族博物館教授）が二年上、馬原君が部落問題研究所で生涯を共にする東上高志君（滋賀大学教授）と経済学に転向した竹村民郎君（大阪産業大学教授）はさらに一年上の学年になる。一年下には森谷尅久君（武庫川女子大学教授）がいた。こうして見ると、ともに学問と人生と社会を語る友人たちに事かかなかったことが分る。田辺昭三君などは、学生運動の上でも馬原君のむしろ背後にあった人物だったといえるであろう。

馬原君の学問的業績としてまず注目されるのは『日本資本主義と部落問題』（部落問題研究所、1975）であろう。1962年からの論文がおさめられている。自由民権と玄洋社への関心が、ここでは部落問題につながっていた。馬原君の

部落解放運動とのかかわりは、恐らく自由民権運動の発展として自覚されていたといっただろう。後でふれる『水平運動史の研究』がそれを物語る。然しここではむしろ筑豊炭坑の労働力と部落との関係が主軸となっていた。玄洋社の主要人物はほとんど筑豊の中小坑主だったのである。ちょうど三井三池炭坑の争議が大きなヤマ場になった時に、それらの論文が発表された。三池大争議の中で、部落民が、労働組合がわと資本のがわに分裂して、相互に対敵したということが馬原君の深刻に受け止めた事実であり、その学問的解明が、後の部落解放運動に処する彼の態度に大きく影響しているように思えるのである。やがて移入される与論島出身者、朝鮮人労働者とともに、部落民が炭坑労働のもっとも苛酷で危険な部分をになったことは、馬原君の業績を通じて学界の常識となったとしてよいだろう。彼の視野はしだいに部落産業に拡大されていき、皮革産業・茶業等の史的なあゆみが追跡された。こうした学問的経過をへて、戦後とくに「高度成長」後の部落労働力の急速な流動化へ目がむけられていく。それからの部落が単なる封建制の遺制にとどまりえないこと、しかもこの部落労働力の流動化を解放にみちびく重要な柱が就職「闘争」にあり、けっして単なる「行政の展開」ではないことが暗示されていた。

馬原君の学問的業績としてこれからも長く学界に寄与しつづけるのが『水平運動史』全6巻（部落問題研究所，1971）の編著であろう。うち4巻は史料集、2巻は複数の研究者による共著になっている。そのうち史料集4巻は主として馬原君の努力によって成った。それまで私どもが部落問題の歴史的研究や同和教育にかかわる講義の時にいつも困ったのは、依拠すべき史料を直接に見る事が大へんむずかしかったことである。それらは多くの研究機関等に分散所蔵されており、閲覧が容易でなかった。『水平運動史』の刊行はその困難にはじめて風穴を明けたといえる。われわれは自分の机上で容易に貴重な史料をひもとくことができるようになった。その各巻に馬原君が書いた解説は『水平運動の歴史』（部落問題研究所，1972）として別に刊行された。ハンディな通史として普及され、『新版・水平運動史』としてその改訂版が彼の逝去の年にやはり部落問題研究所から出された。同じ年の『部落解放運動の70年』（新日本新書）

とともに彼の最後のしごととなってしまった。

勿論、馬原君の学問的業績は、彼の部落解放運動への主体的なかかわりと密接につながっている。彼は研究の結論にしたがって実践することをためらわなかったし、その中でぶち当たった問題を解明するためにさらに研究した。1970年代なかばから90年にいたる彼の執筆したほう大な論文は、『戦後部落問題の研究』共著全7巻（部落問題研究所、1978）をはじめ数冊の著書として刊行された。その方向が「国民融合」をめざす運動と重なり合っていたことはいうまでもない。

馬原君を立命館大学に迎えいれようと私に話されたのは後藤靖氏である。彼の研究業績を高く評価したからであった。私はたまたまその当時に教学担当常務理事（後の副総長）として教職課程委員長をつとめていた。その私にとって一つの大きな課題は、同和教育をより普遍的な人権教育の基礎の上に確立するということにあったのである。私は後藤氏の提案に一も二もなく賛意を表したという次第であった。それからの学内手続きの上では若干の問題が提起されたが、幸いに関係方面の理解を得て、馬原君の着任を見ることができた。馬原君もはじめは同和教育の授業で、彼の見解に反対する学生の妨害を受ける等のこともあったようである。然しこと部落問題の学問的理解で深さも広さもともにもち合わせた彼の説はしだいに大多数の学生の理解を得た。永い間の懸案だった部落問題パンフの書き直しも実現できた。馬原君も母校にもどって水を得た魚のように生き生きと活動しているように見えた。

私的な交情をいえば、ずい分ながいつき合いだったにもかかわらず、酒をくみかわしながらの語り合いというものは多くなかった。筆者が下戸であるせいで、当然だったともいえよう。ただ忘れられないのは1986年1月3日の夜である。掛谷宰平君と一しょだった。めずらしく和服の馬原君はすでに酩酊に近い状態だった。正月だからこちらも酒を出しての話になった。88年3月末に定年退職予定の私のために、記念論文集を出したいというのである。すこし前の時期からその企てを感じていた私は、あらかじめ考えていた拒否の理由を理路整然と（本人はそう思っている）述べた。当然、馬原君は私の述べた理由

に反論する必要がある。それにまた私が反論するということで議論がカミ合はずだ。ところが馬原君は最初いいた主張を寸分まちがいなくくり返すだけなのである。酔っ払いを説得することは不可能というのが、私のえた教訓だった。深夜までカミ合わない話をくり返してもしょうがない。とうとう研究会でも開いて、発表できるような内容の研究が出てくるようなら、その時には一冊の論集にしてもいいだろうというところで妥協した。深夜に私の家を出る馬原君の足もとは千鳥足によろめいていた。

こうして私の定年を記念する『近代日本社会と天皇制』（柏書房、1988）ができて上がった。そればかりではなく、馬原君が代表者となって、この書物に執筆した人たちや立命館大学日本史学専攻出身の日本近代史を勉強する人たちで「近代日本社会と天皇制研究会」ができた。以来ほぼ隔月に研究会が開かれ、2冊目の論集、馬原鉄男・掛谷幸平編『近代天皇制国家と社会統合』（文理閣、1991）も刊行された。この書物は、思わぬ難病で車椅子の生活に入った掛谷君を還暦を機会になぐさめようという馬原君のはからいであることが明らかだった。馬原君はそれを口にしなかったが、執筆者たちはみな彼の熱い友情を理解して筆をとったのである。わざとらしい口上はのべないが、自分の気持をいつも行動でしめす人だった。

馬原君は後輩の指導と面倒見が大へんよかった。研究会には率先して参加し、後のコンパや忘年会までつき合った。この研究会のメンバーがそれぞれの研究領域で頭角をあらわし、ここ3年ばかりの間に、つぎつぎと有力な大学・研究機関に就職していった。その会が今度は私の古稀記念論集を出すという。そのかけの推進者が馬原君であることも私には分っていた。「若手の研究発表の機会にする」という口実に私の反対は弱まらざるをえない。すでに先例ができてしまったのだから。そして私は今さらのように馬原君の温顔を思いうかべるのである。こうして馬原鉄男・岩井忠熊編『天皇制国家の統合と支配』（文理閣、1992）が出来上がった。

何年前だったか、日本史学専攻の研究室旅行で宮崎県の高千穂町にいった。私は馬原君の出身が宮崎であることは知っていたが、高千穂町とまでは知らな

かった。山深い里である。人びとは淳朴そのものだった。馬原君のあのいつまでも直らない九州弁に、私は彼の生地のままの淳朴と温かさを感じないではおれない。下戸の身ながら、一夕を彼と酒くみ交わして、かい間見た高千穂の話などをききたかった。高千穂のむこうがわの熊本は私の生地であり、海軍水上特攻隊員として終戦をむかえたのもその熊本県の天草上島だったのである。

筑豊の炭鉱と部落のこと

戸木田 嘉久

馬原鉄男さんとは経済学部と同僚だったから、しばしば一杯飲む機会があった。酔いがまわると、私との間の話題はいつも筑豊の炭鉱地帯のことであり、この地域の部落のことであった。

「戸木田さん、いちど夏休みに筑豊へぜひ一緒に出かけませんか。一カ月くらいかけて共同調査をやり、筑豊の炭鉱と部落について本格的な研究をまとめてみませんか。お互にその責任があるというものです。」

馬原さんからこう切り出されたのは、二年半ばかりまえ、学部の懇親会が浜名湖畔の温泉宿でひらかれたときのことかと思う。馬原さんとしては、立命高・中学校の校長職をようやく解かれ、これから研究活動にもどろうとされるときであった。私も立命館大学を定年退職して少しは時間的な余裕もでき、懸案の九州炭鉱労働史をまとめてみたいなどと、広言していたときであった。

よし、一緒に筑豊に出かけましょう、酒の勢いもあってお互にそう約束したことは、いうまでもない。しかし、二人ともまたもや当面の仕事に追われ、つまるどころ、この約束は実現できなかった。

筑豊炭鉱地帯は、青春を賭けた私の労働問題研究のホームグラウンドであったし、炭鉱がなくなった今でも、資料蒐集と調査のツボは心得ているつもりであった。馬原さんもまた、筑豊の部落調査にはしばしば出掛けておられ、いくつかの貴重な調査ルートをもっておられるようであった。今になってみると、この共同調査を実現できなかったことは、筑豊の炭鉱労働問題研究、部落問題研究にとって、かけがえのない損失であった。残念というほかはない。

馬原さんの代表的な著作といえば、やはり『日本資本主義と部落問題』（部

落問題研究所，1972年）であろう。この著書の序文で、馬原さんはつぎのように書いておられる。「私に『日本資本主義と部落問題』のテーマをあたえたのは、筑豊の部落であった。筑豊地帯の石炭資本が、労働者と鉱害被害住民にたいする搾取・収奪を強める手段として、いかに部落差別を利用してきたか、十数回にわたる筑豊の調査旅行は、私に実感としてその重要性を教えてくれた。その一部は本書に収めたものの、覚書ふうな記述にとどまり、本格的な論証と鉱害問題を中心とする現状分析はついに果せなかった」。

馬原さんは、戦前・戦後にわたる日本資本主義の発達史のなかに、このように筑豊炭鉱地帯における部落問題を位置づけ、その実証分析を大成することを意図されていた。馬原さんはこの研究課題のために、その後は暇をみては筑豊に出かけ、資料蒐集や聞き取り調査を積み上げてきておられたが、ついに独立の著書にまとめられるにはいたらなかった。これは馬原さんしか出来ない仕事で、部落問題研究にとどまらず、日本の労働問題研究にとっても、大変残念なことである。

さきの著書の序文で、筑豊調査の「一部は本書に収めた」とあるが、これは同書の第一部「日本資本主義と部落問題」のなかの第三章「筑豊炭鉱と部落の形成」における歴史的考察と、第四部「戦後部落の変貌」の第一章「部落の現状概論」、同第二章「部落における労働力の流動形態」において筑豊炭鉱地帯の部落の現状に言及された箇所とを指すものと思われる。

ここにみる論稿はいずれも、従来、九州の炭鉱労働問題研究者が念頭にはありながらも、ついに追究にいたらなかった課題への取り組みであったといっただけであろう。とくに鋭い切りこみで注目されるのは「筑豊炭鉱と部落形成」であろう。この部分は、はじめ『新しい歴史学のために』93号（1964年9月）に所収されたもので、筑豊の部落に言及された馬原さんの最初の論文ではないかと思う。私は、この論文を最初に一読したときの衝撃をいまだ忘れることができない。

実はこの論文が現われる直前のことかと思うが、私自身、第2回部落問題研究者全国集会で（1964年5月、同志社大学）、「炭鉱労働と部落問題」という報

告をおこなっている（『部落』177号，1964年7月臨時号，第2回部落問題研究者全国集会報告，所収）。

私はこの報告の冒頭で、「戦前の日本資本主義の旋回軸をなした石炭産業と部落問題がどのように関連しているのか」という問題は、日本資本主義のなかで部落問題がどういう位置を占めてきたかを考えていく場合の、重要な一つのポイントではないか」と切り出している。

私は1962年4月、筑豊の炭鉱地帯および北九州工業地帯をホームグラウンドとした労働調査をひっさげて、立命館大学経済学部に着任した。その気負いがこの報告の冒頭にも見られるわけだが、報告の中味といえば、「まとまりのない荒っぽい話」で、「研究課題の提起にとどまる」程度のものであった。

たとえば、この報告の第一の柱とした「炭鉱における賃労働の形成と部落問題」では、炭鉱労働の三つの給源という問題を提出している。第一に、明治初期の囚人労働に始まり、大正中期から第二次大戦中にかけて、朝鮮人労働者を中心に、中国人や捕虜の労働に依存してきた系譜。第二に、炭鉱労働力の基幹的給源となった南九州を中心とする貧農などの炭鉱労働者への転出。第三に、炭鉱周辺農村の鉱害問題もからんだ農民層の分解、兼業賃労働を経由した炭鉱賃労働への転出である。

私は、この第三の給源とかかわって、炭鉱周辺の未解放部落をとりあげている。筑豊地帯の農村の兼業化率は福岡全県下よりも高いとしたうえで、同じ炭鉱周辺の農村でも部落農民は炭鉱労働者化する比率が高く、しかも中小炭鉱へ転入した比率が高かったのではないかと、いうわけである。大手炭鉱の中にも部落がみられ、部落出身者の納屋が存在したとも主張している。

私の報告や内容は、このように厳密な論証もない不十分な資料による推定にとどまっていた。ところが、それから四カ月もたたぬ間に、馬原論文「筑豊炭鉱と部落の形成」が発表された。この論文は主題からもわかるように、筑豊炭鉱の発展にともなって部落自体も形成されたと主張するもので、炭鉱周辺の部落農民の分解と炭鉱労働の関係という視点を、大きく揺さぶるものであったといえよう。

馬原論文の主張はこうであった。筑豊の石炭採掘は、当初は近在の農民の手間仕事、その後には在地の貧農や日雇浮浪者たちが専門坑夫になるが、石炭業の盛況とともにそれだけでは足らなくなる。筑豊田川地方の部落は1840年前後（天保年間の末期）に成立したとみられるが、1887年（明治20年）前後に石炭業の形成とともに、筑豊地方全域にわたって部落民のかなり大規模な流入がみられる。筑豊炭鉱業の生成期には、部落民坑夫が炭鉱労働の中心部門を占めていたと推定される。

馬原論文は、さらにつきのようにも主張していた。しかし、農民層の分解が全国的にさらにすすみ、他方、炭鉱労働の機械化がそれなりにすすむもとの、坑夫の確保が幾分は容易になった結果、部落民坑夫が差別され、排除されていた事実を見おとしてはならない。大手炭鉱では、部落民坑夫にたいする差別が露骨となり、職種としては危険な「棹取り」（坑内運搬夫）にしぼられ、他の部落民坑夫の多くは中小炭鉱に移動していくことになった。

当時、この論文は私にとって衝撃的であっただけではない。馬原論文は、筑豊炭鉱業の研究に専念されてきた私の恩師でもある故正田誠一九大教授の遺された著作（『九州石炭産業史論』、九州大学出版会、1987年）や、『追われゆく坑夫たち』（岩波新書、1960年）を書いた故上野英信氏の諸著作が及ばなかった領域に、最初に鋤を入れた本格的な論文としても注目される。

あれからすでに27年が経過する。日本炭鉱業と部落問題をふくむ「日本資本主義と部落問題」研究の新たな著書を、馬原さんにはぜひ書き残して欲しかったと思う昨今である。

馬原さんの懐いで

後 藤 靖

馬原さん。貴方が本当に忽然として私たちの前から姿を消し、もう共に語れなくなってしまったということをこの瞬間にもどうしても信じる事ができません。これが貴方の運命だったというのであれば、私たちはその運命なるものをこの上なく呪います。あまりにも残酷で非情すぎます。私より五歳も若いのに。

歳を取ってくるにつれて、自分より少しでも年下の人が亡くなっていくことほど悲しいことはありません。そこで今日は生きている彼と語るつもりで、彼との長いつきあいについて語らせていただきます。そうでないと、とても苦痛ですし、言葉がつづきそうにありませんから。

馬原さんと私の付き合いが始まりましたのは、彼が立命館大学文学部の日本史の学生であったころからです。卒業論文に「自由民権運動における玄洋社の役割」というテーマを選び、その草稿を持って私を訪れた時からです。たしか1955年10月末だったと思います。私が歴史学研究会の大会で報告をした直後でしたから。

玄洋社といいますのは頭山満らが結成した自由民権派の政社ですが、自由民権運動が1880年を転機として本格的なブルジョア民主主義革命運動として発展していくなかで、次第に国権主義をかけた右傾化していきます。そのために、この政社をどう評価するかは大変に難しい問題なのです。ですから、彼の草稿を丹念に検討しながら、私たちは何回も討議をかさねました。私も若かったものですから、かなりきつい注文もしたように記憶しています。彼は素直にそれを受けとめ、何度も書きなおしてくれました。出来上がった論文を読ませて

らったとき、私はよくここまで掘り下げたものだと驚嘆しました。

当時の彼は痩せ細っていました。食うものも十分には食べていなかったと思います。私も京大人文科学研究所の助手であり、その日その日の生活に難儀していました。だから、彼が訪ねてくれた時も蒸し芋を食べながらでした。それでも、彼にとっては大変なご馳走のようでした。「先生すみません」といって私の分まで食べていましたから。そういう苦勞のなかから、彼の労作は生まれました。そして、その論文が「日本史研究」という雑誌に掲載されました。これが、彼の学界へのデビューです。私は、彼の労作を私の論文や著書にしばしば引用させていただきました。彼は、このことを「幸せなことです」と言っていました。全く律義な人でした。

この彼の卒論を検討しているある日のことです。後に立命館大学文学部の教授となった三浦圭一さんが近くに住んでいました。大徳寺の近くです。その三浦さんとは、銭湯からの帰りに漸く出始めたテレビを近くの小さなうどん屋で見るとを共に楽しみにしていました。当時のスターといえど何といっても力道山でした。彼が空手チョップでアメリカのレスラーを倒すのが痛快でした。何しろ日本はアメリカの占領下にあったからです。丁度、馬原さんが訪ねてきたある日が三浦さんとそのテレビを見る日に重なりました。私たちは力道山がアメリカのレスラーをやっつけるのを見て興奮さめやらず、三浦さんと馬原さんが「力道山やりましたね」といいながら、二人が盛んに空手チョップの手振りをしながらその話に花が咲き、勉強そっちのけになってしまったことも思い出します。その三浦さんも故人になってしまいました。今となっては、かけがえのないお二人の思い出となりました。あの頃を語る二人が共にいなくなりました。淋しいです。

その後、馬原さんは未解放部落問題に取り組み、生涯をささげました。彼のその領域での理論的・実践的な活動については、杉之原先生のお話でお解りいただけたと思います。

彼は著書や論文のすべてを私にも送ってくれました。私はそれらの殆どに目を通し、疑問や注文もつけました。彼の信念は、人間は誰しも平等に生きる権

利があり、それを実現するために研究し、また実践すべきだということでした。だから未解放部落を徹底的に調査し、生活の実情について語り合い、どのようにして融合を実現するかを考え抜いたのです。彼の仕事を追って見ますと、そこには何度かの理論的修正がなされています。およそ、研究者にとって苦心惨憺しながら作り出したものを修正することほど苦しいことはありません。あたかも自分の子供の首を絞めるのにも似ています。彼はそれをやりました。それは、彼が研究者としての誠実さ、それ以上に自分の理論が実践を誤らせてはならないという真摯さを示していると私は考えます。この彼を失ったことは、私自身にとってはかけがえのない友人であった以上に、日本の民主主義運動ばかりでなく、世界の平和と民主主義の発展のための大きな損失といわなければなりません。

もう語れないと思うと、悲しく痛ましいことです。痛恨という言葉で尽くすことはできません。しかし、私はあえて別れは言いません。彼とともに私の生涯を生きぬき、彼がやりたかったことを受け継ぎ、彼が願ってやまなかったことを少しでも実現するための理論的・実践的活動を続けることを誓って、私の馬原さんへの追憶とします。

合 掌

人権・差別研究一筋

真 田 是

馬原さんとはじめて会ったのは、私が京都にきてからすぐの1965年だったと思う。

私は1964年の10月に立命館にきて産業社会学部の発足までの間人文科学研究所に籍をおいていたと思うが、そういうこともあって奥田修三さんに教えられながら部落問題を勉強しはじめることになった。近衛通りにあった文化厚生会館にも連れていかれて奥田さんから紹介されたのが最初だったと思う。少しせかせかした話し方をするが人の良さそうな人という印象を持ったことを覚えている。

多分同じ年に、当時京都にあった出版社の汐文社から『現代日本の社会問題』を4巻で編集出版しないかという話があり、馬原さんと他に仲村祥一さん、小関三平さんに私とで編集企画を進めることになった。馬原さんとの付き合いが実際に始まったのはこの時からである。この作業の中で、仲村さん、小関さんが専攻していた社会病理学は生産的な意味があるものだろうかと馬原さんが私に洩らしていたことを思い出す。部落問題に正面からアプローチし解決のための運動も含めて研究していた馬原さんからすると社会病理学は評論風に思えたのかもしれない。馬原さんの学風が表れた述懐であった。

次に馬原さんとおこなった共同作業は、鈴木良さん、安川重行さんと奈良県同和事業史を作る調査研究に加わった時である。1968年頃からだったと思うが、奈良県庁をはじめ県下の自治体や同和地区でインタビューや資料蒐集をしたり、猿沢の池の近くの旅館で資料の分析や討論を繰り返した。

私としては3人から部落問題の手ほどきを受けたようなもので共同研究の役

には立たなかったが、馬原さんの聞き取りや資料の分別の仕方に随分教えられた。馬原さんは特に聞き取りや資料には飽くことを知らない貪欲さを示し、エネルギーに動きまわって同行する私を辟易させたこともしばしばであった。一日聞き取りや資料蒐集で歩き回って私などへとへとになっているのに、夜は夜でさまざまな話題で談論風発深夜に及んだものである。

この調査研究は時期的には大学紛争と重なっていた。そのため私は後半は参加できなくなったが、馬原さんたち3人は困難な中でも調査研究を全うした。私は中途半端な参加に終わったが、今日まで部落問題を研究課題の一つに据えることになったのにはこの調査研究が大きく影響している。

部落問題の研究を始めるようになってからは馬原さんの書いたものから随分多くのことを学んだ。私の場合は、社会問題研究で日本の社会問題の特殊性に関心を引かれてきたが、部落問題はこの研究関心にとっては焦点の一つになるものであった。

歴史学者としての馬原さんの研究テーマは日本の近・現代史と部落問題なのだから、私が馬原さんの研究業績に注目し触れることが多くなったのは当然である。私のこのような関心にとって馬原さんも参加している部落問題研究所『新版 部落の歴史と解放運動』は適切な手びきになった。これを手掛かりに馬原さんの『日本資本主義と部落問題』を読んで啓発されたことを覚えている。

もう一つ鮮明な記憶に残っていることは、今日の国民融合の理論が形成される過程で、馬原さんをはじめとした部落問題研究所の数人と東京に行って討論をしたことである。

国民融合の理論は解放運動に発生した部落排外主義を深く検討・批判することによって得られたと言えると思うが、私などは部落排外主義の運動の問題点はすぐ分かったが、そこに行き着かざるをえない理論傾向を洗い出すには至っていなかった。したがって、一時は部落排外主義の運動を批判しながら理論としては部落問題の拡大再生産論に傾斜しつづけるという状況を克服しきれず、これは大なり小なり当時の部落問題研究者に見られたものであった。東京での討論はこの辺りの混乱を正す重要な場になったもので、討論は、関西では部落

問題研究の先頭に立っていた馬原さんをめぐってのものになったことを覚えている。

新しい理論が形成されるについての苦渋に満ちた過程を私も目の当たりにしたことであった。部落問題研究所が創立30周年の記念行事として1978年から79年にかけて刊行した『戦後部落問題の研究』全7巻は、国民融合の理論を裏付けあるいは展開するものとして大きな影響を与えることになったと思うが、そこに至るのには上のような経過もあった。

馬原さんはこの刊行事業にも指導的な役割を果たし編集責任者になっている。私も、馬原さんが編集責任者になった第7巻『戦後部落解放運動の研究』に論文を書くように言われ「日本独占資本主義と部落問題」を寄せたが、原稿を送った後会った時、馬原さんが戦前・戦後の部落問題の捉え方は基本的に一致していると言ってくれたことを思い出す。新しい理論での作業で余り自信のなかった私はほっとしたものだった。

馬原さんとの行き来は、私の場合ほとんど部落問題の研究に関わってのものであったが、私が岩倉から右京に移るまでの短期間ではあったけれども違った行き来もあった。馬原さん一家が私が住んでいた岩倉に居を移してきた。同じ岩倉とはいえそれ程近くはなかったが、娘同士が同年で小さい頃に一緒に踊りのバレーを習っていたこともあり行き来していた。

そんなある日、馬原さん達の住んでいる地域の近くで小集会にきて話をしろと言われて行ったことがある。みんなが畳に座っての集まりなのだがそこに馬原さんが夫妻で現れて、私も話づらくて困った。馬原さんはこんな場所にも時間を見ては参加するのだなという感慨とともに帰ったことを覚えている。

部落問題の研究以外でのもう一つの馬原さんとの行き来は学園の理事会での3年間であった。馬原さんが高中校長になったのと私が副学長になったのが一緒に、特に馬原校長は久しぶりの大学教員での校長であったので何かと大変であったと思う。しかも高中移転、男女共学制への移行、学内入試制度の改革など高中の重要課題が山積して遂行されていった3年間であった。週に何回かは必ず会議で同席したが、いろいろな会議で出される高中についての方針を必

要なものと分かりながら、馬原さんの人柄を思うとその具体化のところでの苦衷が思いやられて、判断が揺らぐようなことも一度ならずあったことを覚えている。

馬原さんは研究に志してから生涯それこそ脇目も振らずに差別の研究一筋にやってきた人である。研究者といえども流行のテーマに引かれたり時流に流されたりすることのなとししないが、馬原さんは人柄もあってその気配のまったくない人物であったと思う。このキャリアが鋭い人権の思想と感覚を馬原さんのものにしたが、馬原さんの人権思想・感覚は重く深いものになっていたの、そう再々表に出したり目についたりというものではかえってなかった。時にその重さと深さに打たれるというものであったように思う。

本当に惜しい人を失ってしまった。

馬原さんと「教育実習」

古 寺 雅 男

馬原さんを教職課程教室の一員として、経済学部をお願いしたのは、ずいぶん前のことのような気もするし、ついこの間のことのような気もする。経済学部での自分の専門教科を持たれたが、「社会科教育法」と「教育実習」を担当してもらった。就任してすぐに、いろいろな役職・仕事を引き受けられたのは、馬原さんの温厚な人柄と、労をいとわない真摯な姿勢によるものだと思っている。「馬原さん」と呼ぶのは、わたしと年令も数カ月しか変わらず、高等学校などの生徒を教えてきた現場経験もあり、特に就任をお願いしたことなどもあって腹を割って、ザックバランに話し合ってきたから、「教授」「先生」などお互い呼んだことがないからである。

専門分野は別として、資料を整えた実践に裏打ちされた「社会科教育法」は学生の評判がよかったが、なによりも「教育実習」の際の馬原さんの姿勢にはずいぶん教えられた。実習校視察や実習ガイダンスなども、率先して余分に引き受けてくれたし、わたしたちの嫌がる時間帯にも喜こんで「よし！」と云ってくれた。比較的短期間に集中しがちな「教育実習」のガイダンス、中間視察、研究授業視察、相談は、かなりレギュラーな講義と別に変なものだが、わたしは馬原さんの嫌な顔を見たことがない。立派だと思っている。

三カ年の高等学校・中学校の深草の時も、校長の立場として、教育学者の立場として、また一人の父親の観点から、よく相談をうけた。一カ年の休養研究期間も、よく研究室に来て充電と称して研究していた。わたしが「休んで、何もかも忘れてからでいいよ」と云うと、きまって「ボツボツやってるから大丈夫」と笑うのが常だった。

要なものと分かりながら、馬原さんの人柄を思うとその具体化のところでの苦衷が思いやられて、判断が揺らぐようなことも一度ならずあったことを覚えている。

馬原さんは研究に志してから生涯それこそ脇目も振らずに差別の研究一筋にやってきた人である。研究者といえども流行のテーマに引かれたり時流に流されたりすることのなしとしないが、馬原さんは人柄もあってその気配のまったくない人物であったと思う。このキャリアが鋭い人権の思想と感覚を馬原さんのものにしたが、馬原さんの人権思想・感覚は重く深いものになっていたのだから、そう再々表に出したり目についたりというものではかえってなかった。時にその重さと深さに打たれるというものであったように思う。

本当に惜しい人を失ってしまった。

馬原さんのこと

大 藪 輝 雄

馬原さんが急性心不全で亡くなられた（1992年7月2日）と聞いて、驚きで言葉もなかった。前日の水曜日には1回生の小クラスが同じ時間なので、事務室で言葉をかわしていたし、そのまた前日の火曜日の教授会には隣に坐っていたからである。普段と変わらないように見えていたが、夏休みには入院して検査を受けることになっていたということなので、疲れがたまっていたのであろう。

◇ ◇ ◇

馬原さんと最初に出会ったのは、1980年に彼が立命館大学経済学部の同僚（社会科教育法、同和教育担当）として赴任して来られた時である。それまでも部落問題の研究者としての彼のことはよく知っていたが、個人的に付き合うようになったのは、その時からである。ふさふさとした美事な白髪で、眼鏡の奥にやさしい微笑をたたえた風貌は大人（たいじん）の風格があった。彼は1930年の生まれで、宮崎県でも熊本や大分に近い高千穂町の農家の出身と聞いている。私はその前年に四国の田舎町に生まれたので、何となく馬が合い、その後親しく付き合いしてきた。岩倉と下鴨と帰宅の方向が同じなので、学部の会議や懇親会の後などにご一緒することが多く、北大路駅の周辺で下車して飲み直すこともしばしばあった。ある時などは夜おそくお宅までお邪魔して、奥さんにご迷惑をかけたこともある。馬原さんの娘さんと私の娘とが同級で、そんなことが話題になったりした。

◇ ◇ ◇

彼が京都に出て来て日本近代史を研究するようになった事情について、『学園通信』に随想を書いているのを見て、同じような時代を生きた者として感慨

深かった。

1951年から3年足らず、彼は「九州の片田舎」で中学校の社会科教師をしていた（奥さんはその学校の同僚であったという）。朝鮮戦争を境に、いわゆる逆コースの風が山奥の学校にも吹きはじめていたころである。そうした折り、たまたま出あったのが『中学生歴史文庫』（全12冊・福村書店）であった。そこには古代から現代にいたる日本の歩みが、躍動感あふれる文章で平易に書かれていた。早速、授業で使用したところ、生徒の反応は鋭く、歴史の主人公がほかならぬ自分たち自身であることに、驚きと新鮮な感動を与えた、という。

彼は、この本に書かれている内容をもっと詳しく学びたいと思い、その著者の北山茂夫・林屋辰三郎・前田一良などの先生方のいる京都の立命館に向けてとび出してきた、というのである。「生徒には、もっと勉強して立派な先生になって帰って来る、と約束して。」「同窓会の度ごとに、かつての教え子たちから、『鉄砲玉』といわれるのには、いまでも返す言葉がない。」

彼は時として、ふるさとの教え子が送ってくれた袋一杯のカボスを私にくれたりした。また教え子の一人が作っているというそば焼酎の効用を楽しそうに語って、ふるさとをなつかしんでいた。



馬原さんは、担当が社会科教育法、同和教育であったこともあって、立命の人文科学研究所の部落問題研究室に所属され、長らく室長も勤められて、研究室の中心メンバーであった。私も同研究室の委員としてご一緒したことがあったが、彼は毎回のように研究会のテーマの選定や報告者への依頼などに努力された。また春や夏の実態調査や学習などを積極的に企画された。馬原さんの専門は、主著『日本資本主義と部落問題』（1971年）や『新版・水平運動の歴史』（1992年）に示されているように、日本近代史における部落問題と水平運動以来の部落解放運動史の研究にあったが、その歴史的研究に迫る視角はあくまでも部落の現状とその解放への道におかれていた。それ故、人文の部落問題研究室の研究活動においても、部落の現実とその変化に直接接することを研究の出発点としていた。彼の最初の著作が『部落の現状』（共著、1960年）であった

ことも、そのことを示している。私も何度かご一緒したことがあるが、彼は全国各地に部落問題の研究者や活動家の親しい友人や知人を数多く持ち、彼等に深く信頼されていることをうかがうことができた。現実の実践的課題に深くかかわりながらその歴史的根源を探る。そこに馬原さんの研究スタイルの特徴があったといえよう。

また、馬原さんは国民全体の連帯の見地から、部落問題を広く人権問題の中に位置づけることの重要性を強調され、人文科学研究所のなかの部落問題研究室の人権問題研究室への改組と、学生に配布する『人権問題パンフレット』の全面的改訂に努力された。馬原さんが、学外の部落問題研究所や全国部落問題研究協議会などの中心的メンバーとして展開された多彩な研究活動は言うまでもないが、立命館における教育・研究活動で果たされた役割もまた大きかったと言わなければならない。



馬原さんは、立命に來られて間もなくの1984年には、立命館教職員組合連合の委員長に押され、さらにその2年後には経済学部の主事を勤められた。どちらも激務であるが、馬原さんは学生の意見に耳を傾け、教員スタッフや事務室の条件の改善に深く配慮された。

1988年から3年間は立命館中学校・高等学校校長ならびに学校法人立命館理事を勤められた。教職課程委員会に所属し、中学校の教員をしたこともある彼には適任の仕事ではあったが、北大路学舎から深草学舎への移転と男女共学の実施後の多くの困難をかかえた中で、彼は全力投球で校長の仕事に専念された。

校長の任期終了後の1年間の国内留学中に彼は、水平社創出70年を記念して、『部落解放運動の70年』と『新版・水平運動の歴史』の2冊の著書を書いている。驚くべき仕事ぶりと言わなければならない。

馬原さんはワープロを叩きながら急性心不全のため急逝された。まだ61才であった。あまりにも突然の死であった。奥さんやお嬢さんの思いはいかばかりであろうか。私も同年代の親しい友人を亡って、返すがえすも残念でならない。

“馬原さん” 安らかに

三 好 正 巳

いま、手もとに一冊の本がある。馬原鉄男著『部落解放運動の70年』（新日本出版社）である。馬原さんらしい、丁寧で、明快な分析を、ここで紹介しようというわけではない。この本を手にして、語ろうとするのも、この遺作ともいべき著作が、馬原さんとのつながりとして残された、まだ、馬原さんの温もりのある唯一のものだからである。

馬原さんはいう。「部落解放運動が封建的身分差別の解決という歴史的な課題をなし遂げたとき、自らの組織もまた一般的な住民運動、市民運動組織に発展的に解消させて、歴史の舞台から退場することになる」と。この簡潔な言葉のなかに、馬原さんが、確固たる信念をもって、部落解放運動の展望を記述したことを知る。

かなりまえのこと、同和教育の講義をすることになったことがあった。さて、講義の内容をどうするか。そのときに、馬原さんの『日本資本主義と部落問題』が指針となった。それが、馬原さんとの、はじめての、そして紙上での出会であった。そのご、学部の同僚として迎えることになり、機会あるごとに、啓発されることになった。しかし、部落問題への理解が、すすむことにならなかったのは、それは、馬原さんのせいではなく、わたしの、生来の怠惰のためである。

これも、だいぶん前のこと、教職員組合の委員長として、馬原さんが候補にあがったときのことである。組合大会で推薦の弁舌を仰せつかった。馬原さんの人柄を、権利意識の強い人、温厚で情味ある人と、たしか紹介したように記憶している。この二つの資質は、教職員組合の委員長として、充分以上のもの

であると確信している。もちろん、馬原委員長は、圧倒的に信任された。わたしの推薦の弁は、必要でなかった。誰もが、馬原さんの資質と人柄を、一目で見てとったからである。この委員長時代に、馬原さんに傾倒し、親愛する人達が、いまも、なお、多くいる。

馬原さんが亡くなる2、3日まえ、久しぶりの邂逅に、“喉をしめらせようか”と、一緒に、ビールを飲んだのが、最後となった。日ごろに似ない酒量に、体調を自覚していたものと思われる。それにしても、そのアルコールが、負担になったのではないかと、悔やまれるし、残念にもおもう。

いまも、そのときの、馬原さんの姿が目のにこっている。

4年ぶりの学部教授会復帰で、知らない顔もあり、戸惑いがあるともらしていたのも、激職のあとの、偽らざる、感慨であったろう。

そのときの、馬原さんの思いは、「はやく学部の改革論議になじもう」とすることにあったようである。これも、そのまじめな人柄の故であったと、あらためて思われることである。また、日本史について、こんな講義をしてみたいと、抱負を語っていたのは、馬原さんが、なによりも日本史の研究者であったことだと思う。たしかに、主要な業績が、部落問題の研究にさかれていること、そして、その研究の卓抜さは、誰も、否定はしないだろう。しかし、そのときの、日本史講義にかけた馬原さんの熱い思いを、私は、ただ、講義への希望とは思わない。それは、日本史研究者として一貫してきた不惑の態度から滲みでたものであったと推察している。けっして、馬原さんがもらした、不平、不満ではなかった。それは、日本史研究者として、馬原さんが研究してきたということである。もちろん、そのことが、解放運動の理論家として、その業績をひと揺らぎもさせるものではない。

「民衆」の運動をとおして近代国家をとらえようとした馬原さんの手法は、社会諸運動のなかでも、部落解放運動に焦点をあてることで、近代国家日本の民主主義の実態を、明暗もらさず、鋭くえぐりだすことができたと思われる。そして、部落差別の実態を分析する馬原さんの目は、あくまでもヒューマンであった。しかも、その理論のなかに、部落解放運動を、社会諸運動のなかで連

帯させる確固たる論理と情熱を読みとるとき、馬原さんの行動を支えたその思想の深さを知る。

いま、あらためて、天は、惜しい人を心なく奪い去ったと、恨まざるをえない。

まして、肉親の方々の思いは。

馬原さんと、最後に話し合ったとき、学部の同僚との旅行の話があった。それには、いきさつがあった。一年前、馬原さんと私を呼びかけ人とする、「昭和一桁」を資格とする同僚の旅行積み立ての計画であった。しかし、馬原さんの多忙と、私の怠けとで、計画はそのままになっていた。その計画の実行を、催促されたものである。多忙ななかで、ゆっくり温泉で心身を癒す、あるいは、同年配の同僚と、仕事抜きの一とときを過ごそうではないか、ということが本意であったろうか。そのときの、馬原さんの、やさしい、人なっこい目が、忘れられない。

なかなか、約束した計画の実行はおぼつかないが、その日がきたときには、きつと、馬原さんともども、杯をかわすことを、誰もが忘れることはあるまい。この最後の、ひそやかな約束ごとは、いまも、わたしの負い目になっている。

ただ、ただ、馬原さんの、ご冥福をいのるだけであります。

馬原先生の思い出

松野周治

私が先生に初めて直接にお会いしたのは、約6年半前の1986年の春でした。その年に私は前任校から本学に移ってきたのですが、それはちょうど馬原先生が経済学部主事をされた年でした。それ以来、私にとって先生は、非礼を顧みず述べさせていただければ、いわば「お父さん」のような存在でした。先生がおられるということが安心感を生み出していました。私の怠慢から先生から学ぶことの幾分の一もなし得ていないのですが、部落問題研究室を通じての思い出を中心にして、幾つか述べさせていただきます。

先生は1987年4月、立命館大学人文科学研究所部落問題研究室の室長に就任されました。それに伴い経済学部から同研究室員の追加選出が必要となり、私が研究室活動に参加することになりました。それは私にとって、従来からの課題であった部落問題についての学習を深める貴重な機会となりました。馬原先生は翌年には高校及び中学校校長に就任され、室長の任から離れられました。しかし、室長であるなしにかかわらず、先生は研究室活動に大きな力を注いで来られました。その中で特に印象的であったのは、次の二つのことです。

一つは徹底して実態調査を重視されたことです。常に現実から出発するのが先生の教育・研究の基本でした。私は先生並びに部落問題研究室の諸先生方とともに2回の実態調査旅行に参加することができました。87年夏には、広島市、山口県周東町、岩国市等を訪問しました。90年夏には、和歌山県橋本市、那賀町、吉備町、そして私の故郷である和歌山市を訪問しました。どの調査旅行も準備段階から、先生の存在なしには行い得ないものでした。現地では、単なる見学だけではなく、地域の改善と部落解放のために活動している多くの人びと

との交流がなされました。それらの人々はすべて先生の旧知の方々でした。山口の村崎修二さんのお宅で、焼き肉のごちそうになりながら、伝統芸能の猿芸についてのお話を聞いたことは、忘れられない思い出の一つです。旅行中、時には求めに応じて先生の講演が行われるということもありました。このような先生の存在によって私達は、部落の実態を具体的かつ多方面に学ぶことができました。

先生が強調していたもう一つのことは、先生が部落問題を他の国内及び国際的人権問題の中に位置付け、幅広い観点から把握することです。企業内での人権問題、女性差別問題、外国人労働者問題、さらにはインドにおける被差別カースト問題、南アフリカのアパルトヘイト等々、幅広い人権問題を研究することを先生は提唱されました。そして、研究会で取り上げるだけでなく、お忙しい中、先生御自身が外国調査にもでかけられました。こうした考えが背景の一つとなって、本年度より本学の部落問題研究室は人権問題研究室に発展・改組されました。立命館高校及び中学校の校長の任期を全うされ、1年間の国内留学期間を終えられた先生は、直ちに本年4月より、本学が学生に配布する小冊子「大学で学ぶことと人権」の全面的改訂をはじめ、人権問題に関する活動を再開されました。その矢先のご逝去です。

7月1日（水曜日）午後2時半過ぎ、4限目の講義の前の短い休憩時間を利用して、私は馬原先生と雑談に時間を過ごしていました。場所は経済学部会議室で、その場には奥村剋三先生及び名誉教授の小檜山先生もおられました。話題は当日の新聞で報道されていた今年度の教科書検定の結果についてでした。自衛隊やPKOの記述にたいする文部省の介入の問題性について馬原先生を中心に話し合ったのが、私が先生と言葉を交わした最後の機会となってしまいました。最後まで先生は、現実に提起されている諸問題を言葉に力を込めて指摘されていました。翌日に死が迫っていることなど、だれ一人として気づくすべをもっていませんでした。

突然の逝去により、私達は先生から直接に教えを乞うことはできなくなりました。しかし、私達は今後も先生の言葉を思い返し、書かれた文章を読み返し

ながら、先生の御遺志である人権が尊重され、平和と民主主義が前進する社会の実現に向けてそれぞれの持ち場で努力して行くことを改めて誓うものです。